

木に上った子供

小川未明

青空文庫

あるところに、辰吉たつきちという少年しょうねんがありました。辰吉たつきちは、小さな時分じぶんに、父や母ちちははに別わかれて、おばあさんの手てで育てそだてられました。

ほかの子供こどもが、やさしいお母さんかあにかわいがられたり、姉さんねえや、兄さんにいにつれられて、遊あそびにいたりするのを見ると、辰吉たつきちは、自分じぶんばかりは、どうして、独ひとりぼっちなのであろうと悲かなしく思おもいました。

「おばあさん、僕ぼくのお母さんかあは、どうしたの？」と、辰吉たつきちは、おばあさんにたずねました。すると、おばあさんは、しわの寄よった手てで、辰吉たつきちの頭あたまをなでながら、

「おまえのお母さんかあは、あっちへいつてしまったのだ。」と答こたえました。

辰吉たつきちは、あっちというところが、どこであるか、わかりませんでした。ただ、あちらの雲くもの往來おうらいする、そのまたあちらの、空そらのところだと思おもって、目めに涙なみだぐむのでありました。

「おばあさん、僕ぼくのお母さんかあは、いつ帰かえってくるの？」と、辰吉たつきちはたずねました。

すると、おばあさんは、孫まごの頭あたまをなでて、

「おまえのお母さんかあは、空そらへ上のぼってお星ほしさまになつてしまったのだから、もう帰かえってこな

いのだ。おまえがおとなしくして、大きくなるのを、お母さんは、毎晩、空から見ているのだよ。」と、おばあさんはいいました。辰吉は、それをほんとうだと信じました。それから、毎晩のように、戸外に出て、青黒い、夜の空に輝く星の光を見上げました。

「どれが、僕のお母さんだろう？」といつて、彼は、ひとり、いつまでも夜の空に輝いている星をば探しました。

いつであつたか、辰吉は、おばあさんから、人間というものは死んでしまえば、みんな天へ上つて、星になってしまうものだと聞いていました。

夜の空に輝く星の中には、いろいろありました。大きく、ぴかぴかと、白びかりをするものや、また、じつとして、赤く輝いているものや、また、かすかに、小さく、ほたる火のように光っているものなどがありました。辰吉は、どれが、自分の恋しいお母さんの星であろうと思いました。

「お母さんは、きつと、僕の家屋根の上に来て僕を見てくださるだろう。」と、辰吉は信じました。

彼は、頭の上の空ばかりを探したのでした。そしてやさしそうな、あまり、大きく、強

く光らない、一つの赤い色の星をお母さんの星だときめたのであります。

その星は、目にいっぱい涙をためて、なにかものをいいたげに、じつと下を見下ろしているのであります。

辰吉は、口のうちに、幾たびも、「お母さん、お母さん。」と叫びました。そして、彼は、夜の風に吹かれて、いつまでも外に立っていることがありました。

「辰吉や、風をひくといけないから、家へお入り。」と、おばあさんは、家のうちから呼びました。

すると、辰吉は家へはいりながら、

「僕、お母さんの星を見ていたのだから。」といいました。このとき、おばあさんは、しわの寄った大きな手で、辰吉の頭を黙ってなでなされたのであります。

辰吉が、やつと十二になったときでありました。

おばあさんから別れて、五、六里も隔たった、ある村へ奉公にいかなければならなくなりませんでした。

はじめて、知らぬ家へきた辰吉は、さびしくて、朝、晩、人のいないときには、「おばあさんは、いまごろどうしていなさるだろう。」と、思い出して、目にいっぱい涙をた

めていました。

この家の主人は、どちらかといえば、厳格すぎる人でした。「うんと働かなくちや、いい人間になれない。」といつて、辰吉に、いろいろなことをいいつけました。

辰吉は、使いにやらせられたり、水をくませられたり、いろいろなてつだいを休む暇もなかったのです。こんなとき、どんなに、やさしかったおばあさんのことを思い出して、なつかしく思つたであります。また、ありがたく思つたであります。

しかし、夕飯の後は、いつも、辰吉は、外に出て、自分の故郷にいるときと同じように、空の星を仰ぎました。やさしい赤い色の星は、そこでも見られたのであります。死んだお母さんは、自分についてきて、この家の屋根の上で、じつと見守つてくださるように思いました。

「みんなお母さんが知つていてくださるのだ。」と、辰吉は、空を仰ぎながらひとりですみました。

村の端の方に、寺がありました。寺の境内には、一本の高いすぎの木がありました。夏も、やがて終わりに近づいて、秋になろうとしていたころであります。まだ暑い日がつづきました。子供らはみんな、涼しい寺の境内にやってきては鬼ごっこをしたり、かく

れんぼをしたりして遊んでいました。

「この木は、天までとどいているよ。」と、子供の一人が、高いすぎの木を見上げていました。そのときみんなは、遊びに疲れて、木の下にやってきて休んでいたのです。

「ばか、天は、もつと、高いよ。」と、一人の子供がいました。

「この木は、天までとどいているよ。」と、前にいった子供は繰り返していいました。

「ばか、天は、一里も、二里も、十里も、百里も、もつと、もつと高いのだよ。」と、反対した子供は、それを打ち消して叫びました。

みんなは、二人のいうことをおもしろがって聞いていました。そして、笑ったり、また、ほかのことを話したりしていました。

「だって、星が、木の頂についているじゃないか。」と、前に木が天についているといった子供がいました。

「そう見えたって、ついていないのだよ。」と、反対した子供は、あくまで反対をしました。

「ほんとうに、今日の空は近いな。」と、ほかの子供の一人がいました。

「先生が、秋になると、空気が澄むから近く見えるのだといったよ。」と、木の頂が天

についでいないと反対した子供はいいました。

「だってあんなに、近くなつて木の頂について見えるじゃないか？ 盲目！」と、天と木とがついていると、最初いつた子供が怒りました。そして、二人は、けんかを始めました。

「おい、けんかをするな。よせよ！」と、その中で、いちばん大きな子供がいました。「あのうちに、人間の住んでいる星があるんだつてね。」と、ほかの子供が、口をはさみました。

このとき、辰吉は、おばあさんが、人が死ぬと、みんな天に上つて星となるのだといわれたことを思い出した。そして、先刻から自分も、やはりこの木の頂のところまで、空が低く下りてきているような気がしてしかたがなかつたのです。

「お母さんが、降りてきてくださったのじゃないかしらん。」と、心で思っていました。まだ、二人の子供は、けんかをつづけていました。

「けんかをしなくなつて、いいじゃないか。だれか、木に上つてみればわかるだろう。」と、大きな子供がいいました。

しかし、だれも、この高い木の頂のところまで、上つていくというものはなかつたので

す。

「僕が、上つていこう。」と、辰吉はいいました。

すると、みんなが、びつくりしたように、辰吉の顔をながめました。

「君が上つていく?」

「高いぜ、おつこちたつて知らないぜ!」

「君は、ほんとうに上れるかい。」と、みんなは、辰吉を見て口々にいいました。

辰吉は、独り、黙つてうなずきました。そして、小さなげたを木の根もとに脱ぎ捨て

て、木に上りはじめました。

みんなは、驚いた顔をして、上を見ていました。あたりは、すでに暗くなって、木の枝

が、風に吹かれていますばかりであります。そして、星の光が、すぐ木の頂のところに光つ

ているように、夜の空に美しく輝いていました。

辰吉は、だんだんと上つていきました。そして、小さな体は、黒い枝の間にはいつて、

見えなくなつてしまいました。

「もう、あの高い、頂まで上つたらうね。」と、下では、子供らが話をしていました。

「どうしたんだらうね。まだ下りてこないよ。」

「おうい。」と、木の下では、子供らがわめいていました。

どうしたのか、辰吉は、いくら呼んでも返事をしなければ、また、下りてきませんでした。子供らは、不思議なことに思いはじめました。そして、いつまでも、そこに立って上をながめていました。

夜風は、木の枝に当たって、かすかに鳴り音をたてています。そして、あたりは、まったく夜となつてしまつた。みんなは、ようやく気味悪さを感じはじめたのです。

「きつと、この木の上にだいじやがすんでいて、食つてしまつたのだよ。」と、一人がいうと、みんな、大声にわめいて、その木の下から退いて、上を仰ぎました。中には、家の方へ走つていったものもあります。ただ、木の下には、辰吉のはいっていた小さなげたが、二つ残つているばかりでありました。

こうして、家に逃げ帰つた子供もありましたけれど、また、辰吉の身の上を氣遣つて、いつまでも、その木の下から去らなかつた子供もありました。

「どうして、こんな高い木に上つたのだ。」と、集まつてきた大人たちは、口々にいいました。

しかし、夜で暗かつたから、だれも、気味悪がつて上つていくような人もありませんで

した。ただ、下から大声を出して、呼ぶばかりでした。しかし、やはり、なんの返答もなかった。

「明日になればわかるだろう。」と行って、その人たちは帰りました。

いつしか夜が明けました。みんなは木の下に集まってきました。そして、大人の一人が木の上についていきました。すると枝に、辰吉の着物がかかっているばかりで、体はなかったのです。みんなは、それを不思議に思いました。だれも、その真相はわからなかったのです。辰吉が、こうもりになったというものもあれば、また、辰吉は、ふくろうになつたのだといったものもあります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「少年倶楽部」

1927（昭和2）年7月

※表題は底本では、「木《き》に上《のぼ》った子供《ごども》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月6日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

木に上った子供

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>